

漢法苞徳塾資料	No. 269
区分	疾病論・病症
タイトル	本気・中気・標気・論の示唆するもの 六経弁証と鍼治療との関連で
著者	八木素萌
作成日	1990.03

◎劉渡舟『傷寒論十四講』は六経の「本気・中気・標気」論のよって病証を解析する基本的な方法論を示していると言えよう。

本	水	金	相火	土	君火	木
	寒	燥	火	湿	熱	風
陰陽属性	陰	陰	陽	陰	陽	陽
中	少陰	太陰	厥陰	陽明	太陽	少陽
標	太陽	陽明	少陽	太陰	少陰	厥陰

◎太陽経病

★太陽は寒水の経。本気は寒、中気は少陰・少陰は君火であるから熱化する。寒水は太陽の本気であるが標である「陽」を生じしめる能力を潜在的に有する。これは太陽の中気が少陰の君火で、少陰君火の性質は熱であり、この熱が寒水（太陽の本気）（属性は陰）を温めて「気」化する。この「気」の属性は（陽）で、太陽の位置である体表に出て全身に行きわたり、そこでの「外邪の侵襲を防御する」作用を担っている。

この「標」・「本」・「中」の三者はそれぞれが孤立しているものではなく相互に関連して作用している。この関連性の消息は「太陽病」の病理機序を良く説明する。それは亦、鍼灸の取穴にも大きな示唆をもたらしている。

例えば外邪が体表を侵襲した初期には悪寒が見られる、この悪寒は「太陽の本気」（寒）に従うものであり、発熱が現われれば「標気」（熱）に従ったものとして理解される。経標の症状（太陽経の表証）は脈浮と発熱・頭項強痛・無汗である。この太陽経の病が「太陽の本腑」＝膀胱に及ぶと「腑の症状」である「口渴して小便不利」の症状が追加される。太陽の表証の基本薬方の麻黄湯から五苓散や桂枝去桂加茯苓白朮湯に代えられる事になる。

鍼灸治療への示唆としては、太陽の経証つまり「脈浮・頭項強痛・無汗・発熱」の場合には、太陽の経（手太陽小腸・足太陽膀胱）の榮火穴を取穴し、「悪寒・無汗・頭項強痛・脈浮」の様に「悪寒」が伴われている場合には「中気」つまり「少陰」の「熱」不足か「本気」（太陽）の過剰かであるから、「少陰」の経穴・榮穴を考慮する事、或は「太陽」の原穴・合穴を考慮すべきこと、となる。

◎陽明経病

★陽明の「本気」は燥（金）、「中気」は「太陰の湿」、「標気」は「陽明の陽」で陽明は太陽と少陽の間に位置しているが「合陽」とか「合明」と言われる様に、また「陽盛の気を主り多気多血である」様に、陽気が最も盛んである。故に陰湿でこれを抑制して調和させて置かねばならない。この平衡がくずれて「燥」が過剰になると、まさに「乾燥」の症状が出、これが「標気」の陽に従えば「燥熱亢盛」の病態が現われる、つまり「発熱シ口渴シ大便ハ燥結スル」いわゆる「胃家実」を現わす。「陽明病」の場合、『脾約』（＝「太陽陽明」）・『正陽陽明』・『少陽陽明』の区別の問題と、『陽明経病』と『陽明腑病』そして『太陰病』を診別する問題と、これらが明らかでなければならない。

『太陽陽明＝脾約』の病症は、

- a) 「太陽病」の治療による発汗や吐法または下法などの結果として津液が損傷された為に「燥化」が起こり「脾」が「胃」に津液を送り行くらせる作用が失調して大便の秘結を引き起こしている『脾約』
- b) また元々「胃」が「燥」わく傾向を持っていた者に「太陽病」を病んで「陽」気が過多となるので「脾」陰が制約される事となる『脾約』

この二種類の『脾約』がある。これは「太陽病」が「陽明」に明らかな影響を与えている段階で、未だ「陽明」病に移行しているとは言えない段階である。

『正陽陽明』について成無己は「邪陽明ノ経ヨリ至リテ腑ニ伝入スル者 之レヲ正陽陽明ト為ス」と述べている。これを一口に「胃家実」と呼ぶ。この外証は「身熱・汗自出・不悪寒・反悪熱也」つまり熱が出てジトジトと発汗し悪寒しないで返って悪熱するのである、内証としては「口渴き大便は燥結」する。

『少陽陽明』は本来「和法」を用いて治療するものであるのに、発汗法や下法（小便を利すのも下法）で治療した為に、津液を損なう事となった為に、「胃」燥を招いて『陽明』も病証を現わすに至ったものである。この事を傷寒論は「少陽陽明者発汗利小便已 胃中燥煩実 大便難是也」（少陽陽明トハ 発汗シ小便已ニ利シテ 胃中燥シ 煩シ 実シ 大便難是レナリ）と記述している。

「陽明」の『経病』＝『経証』と『腑病』＝『腑証』の区分の問題では、

- a) 『腑証』は「宿食・宿便」と「熱邪」とが相互に結合して病症を出現させている状態であって「腹満」と「大便の燥・結・秘」があるものを言う。実証であるが病因の軽……